

1962年東京都生まれ・埼玉県育ち。1985年建設省入省。
四国地方建設局国営讃岐まんのう公園工事事務所調査設計課長、
北海道開発庁地政課開発専門官、九州地方建設局国営海の中道海浜公園工事事務所長、
都市・地域整備局公園緑地課企画専門官、(独)都市再生機構業務第三部公園計画チームリーダー、
滋賀県土木交通部技監(兼)商工観光労働部技監(兼)総合政策部技監、
都市局都市計画課環境計画調整官、さいたま市技監を経て、2016年より現職。

OMIYA
PEOPLE
No.002



古澤達也 | 国土交通省都市局公園緑地・景観課緑地環境室室長

国の視点から見る大宮の役割と魅力

「UDCO PAPER——ひとを紡ぐ」#002では、2014年4月から2016年6月までの2年間、国土交通省よりさいたま市技監として出向され、国全体の視点から大宮を捉え位置づけてきた古澤達也さんに、技監時代に大宮の街について考えられたことを伺いました。

❶ 大宮駅グランドセントラルステーション化構想は何を目指していますか。

古澤 私がさいたま市の技監に着任したのは2014(平成26)年です。ちょうど同じ時期に「さいたま市成長戦略」が公表されました。成長戦略は7つのプロジェクトで構成されていますが、そのひとつ「東日本の中枢都市構想」の中核をなす施策が、大宮駅の利便性の向上を目指す「大宮駅グランドセントラルステーション化構想(GCS構想)」です。北陸・北海道新幹線が開通し、新幹線6路線が発着することになっ

た大宮駅のさらなる利便性向上や、東武野田線とJRの乗換えを改善するという課題が、その背景にあります。大宮駅の東口は、戦時中にほとんど空襲の被害を受けなかったため、都市基盤が戦前と変わっておらず、土地利用が高度化している現在では無理が生じています。過去に、駅前広場や市街地再開発の都市計画決定までされましたが、白紙撤回され、改めて大宮駅周辺地域のあり方を議論し策定されたのが「大宮駅周辺地域戦略ビジョン」(2010年)です。

GCS構想を進めるためには複合的な視点が必要になります。たとえば、乗換え改善には、駅のホーム改築とともに老朽化した駅前的大型商業施設の建て替えも必要でしょうし、1日当たり60万人の乗降客をさばくためには新たな東西通路整備の検討も必要です。また、交

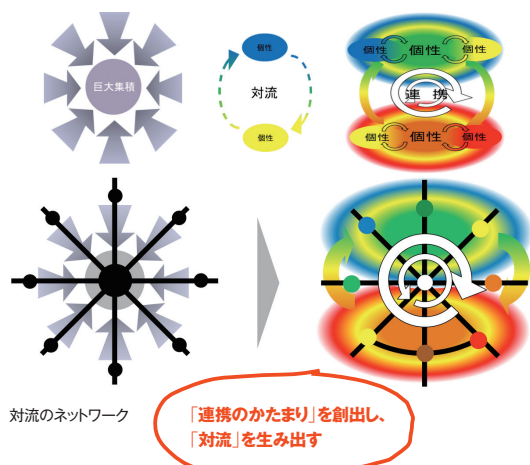
通容量が不足する駅前広場を広げるためには周辺の再開発が不可欠ですが、先行する大門町2丁目の再開発や大宮区役所移転がトリガーとなる工夫も必要です。つまり、GCS構想は、駅や東口市街地の構造そのものを見直すことが本来の目指すところなのです。

❷ 国土計画のなかで大宮はどのように位置づけられていますか。

古澤 戦後7番目の国土計画である「国土形成計画(全国計画)」には、その基本コンセプトに「コンパクト・プラス・ネットワーク」(人口減少に立ち向かう地域構造・国土構造)が掲げられています。私が技監に着任した1年目に、この全国計画を受けた「首都圏広域地方計画」の策定が開始されましたが、そのなかに大宮の重要性を位置づけていただけるよう、市役所職員と知恵を絞って国土交通省と調整を行いました。

首都圏広域地方計画は、①2020年の東京オリンピック・パラリンピック後の首都圏像をどう描くか、②インフラストックをいかに賢く使うか、③切迫する首都直下地震にいかに対応するか、④急激な人口構造変化にどう対応するかの視点から、今後の首都圏のあり方を論じています。その方向性のひとつが、「東京一極集中から対流型首都圏への転換」です。異なる個性を持つ地域が相互に連携することで、ヒト、モノ、カネ、情報、知識等の活発な流れが生じて新たな価値が創造される。その新たな価値が、さらに新たな流れを生むような好循環が、地域や国土に活力をもたらすという概念です。

首都圏広域地方計画では、新幹線や高速道路網などの交通ネットワークを活用しつつ、「連携のかたまり」を数多く創出し、それによって「対流」を生み出すことを目指しています。その際、戦略的に創出すべき「連携のかたまり」として、「軸コンセプト」「圏域コンセプト」「地



域群コンセプト」「対流拠点コンセプト」の4つのコンセプトが提示されていますが、そのうちの「対流拠点コンセプト」となる重要な地域のひとつに、さいたま市が位置づけられたのです。さいたま市は北海道、東北圏、北陸圏の窓口となる交通の要衝です。企業の取引機会拡大や販路拡大、連携によるイノベーション創出の取り組み支援、広域周遊観光ルート構築などの玄関口になるわけです。この地の利を活かさない手はありません。また、リニア中央新幹線ができると、東京、名古屋、大阪の三大都市圏が1時間以内で結ばれるスーパー・メガリージョンになります。すると、東京都心を挟むように、東日本の玄関口となる「大宮」と、西日本の玄関口となる「品川」が都心を支える構造になるんですね。このような位置づけにある大宮やさいたま新都心のポテンシャルを、どう認識して活かしていくのが大切です。

Q 防災拠点としてはどのような位置づけでしょうか。

古澤 もし、首都直下地震が発生すると、東名や中央道、東海道新幹線などが機能しない可能性があります。その場合、災害救援活動は東北道、常磐道、関越道を使って東京に入らなければなりません。さいたま市は、平時は経済的な玄関口ですが、緊急時には救援活動の大事な拠点になるわけです。

さいたま新都心の東口では区画整理事業が進んでいますが、そのなかに防災公園も整備中です。国土交通省にはTEC-FORCE(緊急災害対策派遣隊)という技術者集団があり、緊急時には全国から職員と必要機材が集結して災害対応にあたりますが、この防災公園はTEC-FORCEの集結拠点としても使えるように考えられています。司令塔となる、さいたま新都心合同庁舎の関東地方整備局もすぐ近くです。新都心には関東管区警察局もあり、市内には自衛隊の駐屯地もありますから、さいたま市は防災拠点としても相応しいわけで

す。ただし、区画整理事業と防災公園整備が完了するには一定の時間がかかりますので、さいたま市内にキャンパスを持つ日本大学、関東地方整備局とさいたま市の三者協定を結び、災害時にはキャンパスを使わせていただくことになっています。

災害時の救援部隊が使用するルートは道路だけではありません。荒川など一級河川の堤防の高水敷(水が流れる低水路より一段高い部分の敷地)

には幅員10mほどの舗装道路が

通っており、これを使えば市街地を通らず都心に到達可能です。全国からさいたま市に集まった緊急物資を川崎市東扇島の広域防災拠点に搬入する防災訓練として、日大大宮キャンパスに集結した自衛隊が荒川を下って小松川まで運搬する訓練も実施しています。

このように、首都直下地震の発災時には、首都圏の機能をバックアップする最前線となるわけです。だからこそさいたま市のなかでも大宮と新都心が、国としても非常に大事な場所として位置づけられたのです。

一方で自らの街に目を転じると、大宮駅の周辺、特に東口の南銀座や北銀座の辺りは、雑居ビルが密集していて危険です。首都直下地震時の防災拠点は新都心にお任せすると、大宮駅の周辺は、自らの身を守るための対策をする必要があるかもしれません。

Q 大宮の魅力はなんでしょう。

古澤 まず筆頭は氷川神社です。私は東京の葛飾で生まれましたが、小学校6年のときに川口に引っ越して、いまも実家があります。高校が浦和だったので土地勘がありますし、初詣は氷川神社に行っていました。だから、大宮はふるさとだと感じています。

国家公務員は転勤が多いのですが、以前、四国に転勤したときに埼玉とまったく違う印象を受けました。匂いが違うんです。土壌と植生の匂いですね。四国は花崗岩が崩れた真砂土ですが、埼玉は関東ローム層ですね。だから土と植物が違い、水や空気が全然違う。匂いで昔の記憶が突然蘇ることってありませんか。私は転勤中の帰省時に、そのことを強烈に体感することができました。そして、大宮で生まれ育った方にとっては、蘇る記憶の象徴が氷川神社になるのではないかと思います。

それから、見沼田んぼをもっと身近に感じられるといいですね。大宮駅から、さいたま新都心駅からもすぐ近くですから。神社や田んぼは、われわれの先祖が築き上げてきた営為

の結晶です。その象徴が氷川神社と見沼田んぼであり、これらは大宮の一番の財産だと思います。

また、大宮の交通結節点としてのポテンシャルは大きな魅力ですから、将来に向けて機能を高めることも重要だと思います。大宮駅周辺はようやく都市再生緊急整備地域になりました。都心のような巨大建築物ではなく、そこで生活する方が住みやすく使いやすくすることを念頭に、身の丈に合った絵を描くことが大事だと思います。

それと、中央通りの真ん中にケヤキ並木がありますが、あまり見栄えがよくありませんね。東京の表参道のように、枝葉が横に広がるようなケヤキにすれば、印象が大きく変わると思います。建物は出来上がったときはきれいでも、あとは劣化する一方ですが、成長していくのは木だけです。中央通りの設えをうまくデザインして、氷川参道と交わり、その先には見沼田んぼが広がっている——。そんな見通しができるといいですね。年を重ねると緑のありがたみが骨身に沁みるものです。

Q UDCOへの期待はありますか。

古澤 一番の期待は、大宮のこれからの夢を語る場であることですね。まちづくりに対して、いろんな意見や見方があると思いますが、大事なのはそこで生活を送られる方々が、住みやすく、子どもにも住んでほしいと思える場になること。だから、ぜひ自分のお子さんやお孫さんの顔を思い浮かべて夢を語ってほしい。シビアな問題からも目をそむけずに、外部の専門家の意見にも耳を傾けつつ、自分たちで夢を語れるといいなと思います。UDCOは実質的な議論ができる場を提供されていますよね。その意味はとても大きいです。

もうひとつの期待は、いろんな方が分け隔てなく、議論に関われるような雰囲気づくりです。住む場所と勤め先の場所が異なるサラリーマンは、地元のコミュニティと切り離されていることがあります。普段から大宮で生活や商売をされている方だけではなく、そうした方も議論に入りやすい、そんなオープンな場になることを期待しています。

オープンな議論の場に

UDCO PAPER #002 ——ひとを紡ぐ

2018年6月1日発行

編集・発行：UDCO[アーバンデザインセンター大宮]

編集協力：水野雄太

デザイン：刈谷悠三・角田奈央/neucitora

問合せ先：UDCO[アーバンデザインセンター大宮]

330-0802 埼玉県さいたま市大宮区宮町一丁目60番地

大宮ラクーネ8Fまちラボおみやや内

TEL: 048-782-9679 | FAX: 048-782-9680

©2018 UDCO All Rights Reserved